

《症例報告》

各種画像検査が診断と治療方針決定に有用であった 高齢者肥大型心筋症の一例

谷口 泰代* 野口 輝夫* 細川 和也* 山田 直明**
石田 良雄** 後藤 葉一*

要旨 労作時息切れを主訴に来院した 84 歳女性症例で、過去の心精査で閉塞型肥大型心筋症と中等度大動脈弁狭窄症と診断され、近医経過観察中であった。入院精査の結果、心エコー図検査と心臓 MRI では中隔の著明な壁肥厚があり、流出路狭窄には高度の圧較差を認めた。大動脈弁自体も高度石灰化を伴う中等度の狭窄進行があった。MRI 上 Delayed enhancement は認めず、心筋血流 SPECT ではエコーと MRI で指摘された心筋肥厚部位に一致した血流増加があった。肥厚部位を中心に血流像と BMIPP 脂肪酸代謝像にミスマッチを認めた。以上より、本症例の症状には流出路狭窄に伴う心仕事量の増大と虚血を含む心筋障害の関与が疑われ、 β 遮断薬内服で左室圧較差の減少とともに症状が軽快した。成人肥大型心筋症は本邦で多く見られ、高齢化社会において増加する弁膜症や虚血性心疾患とともに、合併症例に遭遇する機会も今後まれではない。治療方針の決定にも、本症例のように複数の画像モダリティを用いた非侵襲的検査の必要性はさらに増加すると思われる。

(核医学 43: 307-313, 2006)